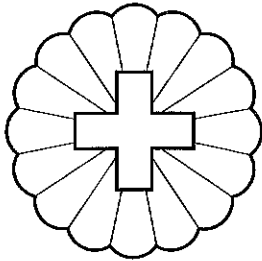


会報

— 15号 —

平成28年11月30日発行
発行者 皆川 浩一
広報編集者 小島南海雄



公益社団法人 東京都はり・きゅう・あん摩マッサージ
指圧師会広報局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町37-4
Tel 03(3252)8811 Fax 03(3252)8813

平成28年度後期東京都委託施術者講習会 (第6～10回)の開催要項のお知らせ

松田博公(都師会副会長)、杉山勲(都師会大田支部長)による、杉塾、松塾の開催日程は以下の通りです。会場は昨年度と同様、松塾は都師会会館3F会議室(千代田区神田東松下町37-4 ☎03-3252-8811)、杉塾は東京都障害者福祉会館会議室(港区芝5-8-12 ☎03-3455-6321)です。

開催テーマは次の通り。

《松塾》

- 第6回 11月12日(土) 10:00～12:00 「中国古代思想と鍼灸理論」
- 第7回 12月3日(土) 10:00～12:00 「灸は邪気を払うシャーマン呪術だった」
- 第8回 1月7日(土) 10:00～12:00 「黄帝は4つの顔を持つ～『明堂』の起源」
- 第9回 2月4日(土) 10:00～12:00 「『素問』上古天真論の新しい読み方」
- 第10回 3月4日(土) 10:00～12:00 「今期のまとめ」

《杉塾》

- 第6回 11月6日(日) 10:00～16:00 「経病の病症診断入門」
- 第7回 12月4日(日) 10:00～16:00 「証の決定入門」
- 第8回 1月8日(日) 10:00～16:00 「陽経治療の基本」

※開催日は予定です。また、この回のみ会場を変更いたします。

都師会事務局(03-3252-8811)でご確認ください。

- 第9回 2月5日(日) 10:00～16:00 「陰経治療の基本」
- 第10回 3月5日(日) 10:00～16:00 「今期のまとめ」

公益事業実施報告

「日本を代表する臨床家による日本伝統鍼灸・マッサージの
神髄を学ぶ」

平成28年度第2, 3回東京都委託施術者講習会の講座から

第2回は7月17日(日)、第3回は8月21日(日)に新橋ビジネスフォーラムにて、13:00~17:00に開催されました。講座内容の要旨は以下の通りです。

■脈はいのちの状態を示す重要なサイン

——平成28年度第2回東京都委託施術者講習会

講座：すぐできるVAMFIT（経絡系統治療システム）入門～脈診の基礎から本治法・標治法まで

講師：木戸正雄（日本鍼灸理療専門学校教務部長、経絡治療夏期大学講師）

木戸正雄先生は、^{けいらく}経絡治療派の臨床家である。経絡治療は、一般に手首の脈診部位で、心・肝・脾・肺・腎のどの臓の精気（エネルギー）が虚している（減っている）かを診断し、その虚した臓器に繋がる経脈（気血の通り道）に作用する手足のツボに鍼をして気血のバランスを整え、体に備わる病を治す力を支援する方法である。その流派に属しながら、木戸先生は中国伝統の宇宙論を探究し、「VAMFIT（ヴァンフィット＝経絡系統治療システム）」や「天・地・人治療」と名づけた独自の技法を開発してきた。古典研究者であり、新技術の発明者なのである。

今回の講座も、「VAMFIT」と「天・地・人治療」の解説から始まった。「VAMFIT」は、頭から足まで12本あるという「正経」の経脈や8本あるという「奇経」の経脈を使うタテの気血の流れを利用した治療法であり、「天・地・人治療」は、大宇宙の天・地・人の3層は人にも存在すると考え、人体を天・地・人の3層に分割して診断・治療する、輪切り構





造の治療法である。タテの流れとヨコの構造の二つを組み合わせ合わせて治療するのが、木戸式経絡治療なのである。

模擬治療が始まると、木戸先生は、まず普通の脈診法で、「肝」や「腎」「脾」などの臓器の虚を診た。そのあとで、仰向けに寝た男性の頭の側に座り、首に触って圧痛や凝りなどを触診した。

「首にはすべての経脈が流

れているので、どの経脈が病んで変動しているかを、首で診断できて当たり前なんです」

首の胸鎖乳突筋の周辺には、天容、天髎、天柱、人迎、扶突、天窗という六つのツボが並んでいる。それぞれ、足の少陽胆経、手の少陽三焦経、足の太陽膀胱経、足の陽明胃経、手の陽明大腸経、手の太陽小腸経という6本の経脈にかかわるツボである。木戸先生は、それぞれのツボを押さえていった。各ツボの表層（陽の部位）に圧痛やしこりなどの反応があれば、胆経、三焦経、膀胱経、胃経、大腸経、小腸経の病証だと考え、深部（陰の部）に反応があれば、肝経、心包経、腎経、脾経、肺経、心経の病証だと考える。これですべての経脈が診断できるわけである。

診断が決まったら、首のツボに鍼をするのではなく、足のツボに鍼をする。首は診断をするだけである。足には下合穴や絡穴と呼ばれる一群のツボがある。下合穴には上巨虚（大腸経）、下巨虚（小腸経）、委陽（三焦経）、足三里（胃経）、委中（膀胱経）、陽陵泉（胆経）というように、陽の部の経脈が治療できるツボがずらっと並んでいる。それを使って病んでいる経脈に働きかけ、全身の気血を大きく動かして調整するわけである。

施術が効いているかどうかは、症状や主訴が消えることで分かるが、脈の変化でも分かれると木戸先生は語る。

「脈はいのちの状態を示す重要なサインです。体が変わらずに脈だけ変わることはあり得ない。脈を通して体の中を見ているという意識が必要です」

そして、「ちゃんと治療したのに脈が変わらない場合は、おかしいと思わなければいけない」ともおっしゃった。

あるとき、診立ても間違っていないし、治療も正しく行ったはずなのに、患者さんの脈は治療前と同じく浮いて強く打ったままだった。おかしいと思い、病院で検査するように

勧めた。しばらくしてその患者さんからお礼の電話があった。

「くも膜下出血をしていたことがわかり、緊急手術で一命を取り留めたというんです。だから脈は大事です。脈が示すものを、きちんと察知しなくてはいけないんです」

次に「天・地・人治療」である。「天・地・人治療」は、人体は大宇宙に照応する小宇宙である、という中国古代の天人合一思想に立脚している。そんなことをいうと、医学を科学と考えたい人は反発するかもしれない。確かに中国伝統医学は古代科学が生んだが、古代科学は宇宙論的な哲学や思想と深い関係にある。脈診自体がそうである。

木戸先生は話した。

「手首の脈で全身の状態を知る脈診法がなぜ成立したかというところ、大宇宙の天・地・人3層構造は人体の天・地・人3層構造に対応し、人体の天・地・人3層構造は手首の天・地・人3層構造（専門用語で寸・関・尺3部と呼ぶ）に投影されていると古代人が考えたからなんです」

人体の「天」の部は頭、「地」の部は下肢、「人」の部はその間にある体幹である。そして「天」はさらに天・地・人の3部に分かれ、「地」「人」もおのおの天・地・人に分かれる。「このようにして、小宇宙は際限なく、どこにでもあると考えるます」と木戸先生。

このように、宇宙も人体も無限の入れ子構造になっているという考え方は、現代の科学哲学にもあり、「フラクタル理論」や「自己相似性」と呼ばれている。古代思想と現代哲学は一致しているのである。

これを応用した治療法を木戸先生は「天・地・人・小宇宙治療」と命名した。一例として、木戸先生は喉の症状を手の合谷のツボの鍼で取る方法を挙げた。人体を大きく天・地・人の3部に分けると、喉は頭の「天」と体幹の「人」の境界にある。一方、手を天・地・人の3部に分け、手首に近い部分を「天」とし、指の部分を「地」とすると、その間は「人」の部に当たる。合谷はちょうど手の「天」と「人」の境界にあり、人体の喉に対応している。だから、ここに鍼をすると喉にいい影響があるという考えなのだ。この関係を利用すれば、合谷で目、口、腰、膝、足関節、肩、肘、手関節などさまざまな部位の治療ができることになる。

こうした不思議な治療法は、疑っているだけではつまらない。まさに試してみるべきだろう。木戸先生は、もとは理科系の研究者を目指していた。その方が、古典研究という文科系の学問とクロスさせて、鍼灸の新境地を開拓している。探究心に満ちたその姿勢からたくさん学びたいものである。

木戸先生の講義は、関西なまりの独特のシャレが次々に飛び出して楽しい。聴講者は120人を数え、東北や中部、関西から参加した方もいた。

(文責・松田博公)

■灸は、鍼とともに臨床の両輪である

——平成28年度第3回東京都委託施術者講習会

講座：深谷灸法入門（灸は効くものではなく効かすもの）～プロフェッショナルきゅう師への第一歩

講師：福島哲也（東京医療専門学校教員養成科非常勤講師，灸法臨床研究会代表，東京九鍼研究会講師）

真夏の盛り，集まった大勢の参加者の実に半数近くが学生ということも影響してか，会場は異様な熱気に包まれた。参加者用の各テーブルの上には，ライターに線香，取穴に用いるタコ紐^{ひも}，灰皿代わりの銀紙とそこに盛られた女性のコブシほどはあろうかという良質モグサの山。なかなかめずらしい光景である。そもそも，まことに残念なことではあるが，日本の鍼灸界の現状として灸の講習会というものの自体がめずらしい。もちろん，そこには火気を使用するため，会場をおさえ難いという理由も少なからず存在する。しかし，本当にそれだけであろうか。最も危惧すべきは，現在の多くの鍼灸師における「はり」と「きゅう」を比較した場合の「きゅう」に対する比重の軽さにこそあるのではないか。

福島哲也先生は，講演の冒頭，唐代の伝説的名医・孫思邈^{そんしぱく}の著作『備急千金要方』^{びきゅうせんぎんようほう}から，「若鍼而不灸，灸而不鍼，皆非良医也（鍼して灸せず，灸して鍼せざるごときは，皆，良医にあらざるひも）」という一節を引用し，「『はり』と『きゅう』は共に鍼灸師が臨床を行う上での両輪なのです」と強調した。上記の一節を訳すと，「鍼を用いて灸を用いない，あるいは灸を用いて鍼を用いないというのはどちらも良医とはいえない」という意味になる。その上で，「施術において一定のレベルにまで到達するのは『はり』よりも『きゅう』の方が簡単なのです」という主張を皮切りに，深谷灸法における指針「灸法の基本十項」についての解説に移った。

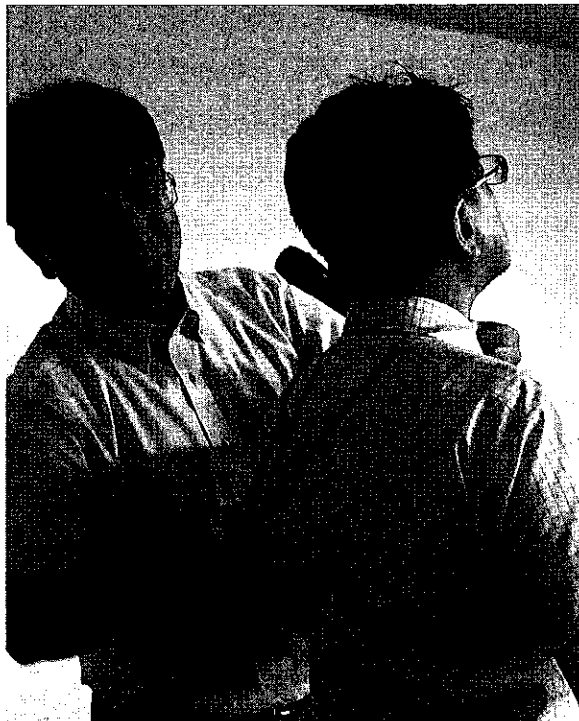


「灸においてはその都度患者の状態に合わせて艾炷^{がいしゅう}の形状や大きさ，ひねり具合（硬さ）を変える」，「線香は半分に折って使うと扱いやすい」，「点火の際に線香を体表に近づけすぎると熱いので艾炷の高さを1cmくらいにする」，「灸の燃焼や光の様子から得られる情

報」など、興味深い実践的な灸法の知識も披露され、参加者は皆、福島先生の軽妙な語り口に真剣に耳を傾けていた。講習を進める上で関連する内容を説明するにあたり、福島先生は、その都度、持参した貴重な私物の書籍や資料などを惜し気もなく参加者全員に閲覧させて下さった。各書籍の紙面の隙間の書き込みに先生の研究に対する熱意の深さが窺い知れ、感銘を受けた参加者の方も多かったと思う。

一方で、胃の六つ灸の説明の折、^{かくゆけつ}膈俞穴の効能に話が及んだ際には、「膈俞穴の^{けつえ}血会（血の停滞に関連する症状を治すツボ）としての効能については、（自身が）臨床で試していないのでわかりません。」と明言するなど、臨床経験によらない内容に関しては語らないという先生の指導に対する姿勢と誠意が感じられる一場面もあった。それは同時に先生の人柄とその講習内容に対する信用性の裏打ちといえるだろう。

また、前回の福島先生の講義（平成27年度東京都委託施術者講習会）に参加されていた方々にとっては、今回の講義で配布された資料が前回のもと同様であったにもかかわらず、講習内容は前回のものとは大きく異なっていたということも、興味深い点であ



ただろう。「本当に重要なことは本には書かれていません。本当に重要なことは、口伝なのです。」とは、その夜の懇親会で福島先生がおっしゃった言葉だ。前述の深谷灸法における指針「灸法の基本十項」の一つに、「経穴（ツボ）は移動する」というものがある。その意味は、経穴書は「ツボ」の大体の位置を知るための参考に過ぎず、臨床においてはさらに圧痛・硬結を基準とした「活きたツボ」を取穴しなくては、よりよい効果をあげることはできないというものだ。今回の講習内容も、この指針に

通じる場所があったと思う。つまり、今回の講習で先生から参加者に語られた内容は、まさに「口伝（活きた内容）」であったに違いない。

講習会終盤、福島先生は、「鍼灸の基本原則は、陰陽の調節と経脈を通わせることの2点に尽きる」とおっしゃったが、日本の鍼灸界においても「はり」と「きゅう」という陰陽の均衡を調節し、滞りなくその道を歩いていくことが重要なのではないか。そのような日本の鍼灸界を取り巻く問題についても再認識させられる有意義な講習会であった。

（文責・山下克）